様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　5　月　25　日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007　～　2009 年度
課題番号：19510263
研究課題名（和文）戦争、市民、ネイション：オーストラリア、インドネシア、日本を繋ぐ太平洋戦争の記憶

研究課題名（英文）War, Citizen, Nation: Memories of the Pacific War connecting Australia, Indonesia and Japan

研究代表者　鎌田　真弓（KAMADA MAYUMI）
名古屋商科大学・マーケティング学部・教授
研究者番号：　20259344

研究成果の概要（和文）：本課題では、１）オーストラリアにおける太平洋戦争の記憶の特徴と日豪の非対称性を明示し、２）そうした記憶から抜け落ちている、豪北部・東部蘭領インドネシア・パプアニューギニアでの現地住民や女性の戦争体験を掘り起こすことによって、３）国家や軍隊の「戦争の記憶」に回収されない戦争体験を提示し、地域史として共有可能な「戦争の記憶」の再構築を試みた。

研究成果の概要（英文）：In the project, firstly, we clarified the characteristics of the 'memories of the Pacific War' in Australia, and asymmetrical nature of the memories between Japan and Australia, and secondly focused on the experiences of residents and women in Northern Australia, Dutch Indonesia and Papua-New Guinea during the war. Thirdly the research uncovered the experiences of people during the war which were not identified with the 'memories of war' of a nation or an army, and reconstructed 'memories of war' as a historical sphere across nation-states.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
19 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
20 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
21 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：1）アラフラ海　2）太平洋戦争　3）地域史　4）オーストラリア：インドネシア：日本　5）戦争の記憶　6）豪文学　7）日豪関係

１．研究開始当初の背景

戦後 60 年を経ても、太平洋戦争の記憶や歴史認識は東アジア諸国の政治的課題であり続けている。国家の戦争体験として語られる戦争は、それぞれの国家で選別された事象が記憶され、「国民の物語」として語られる

戦争体験は、当然のことながら、国家間での非対称性を生む。例えば、日本にとって太平洋戦争は対米戦争であるという認識が強いが、オーストラリアにとって太平洋戦争は、まさしく対日戦争であった。

「戦争の記憶」に関する研究は、こうした国家や国民の戦争体験を前提としており、国境をまたぐ地域において、戦争によって引き起こされた住民や先住民の体験と集団的記憶を分析した研究は少ない。本課題に取り組むにあたって共同研究者が共有していた問題意識は、国家間関係では見えてこない「戦争の記憶」を考えてみたいということであった。戦場は国境を越えて広がるものであるし、しばしば戦争が国境を作り出す。戦争は「軍隊」や「兵士」のみが体験するものでもないし、「追悼」や「慰霊」は過去の出来事への解釈であって、時代によって変わるものである。本共同研究では「戦争の記憶」を変化する時間軸の上に置き、「国民の物語」に登場しない人々や「周辺」の人々の体験に着目して、国家間で硬直しがちな歴史認識をめぐる議論を、地域史として共有可能な場へと開くことに貢献したいと考えた。

２．研究の目的

オセアニアと東南アジアを繋ぐアラフラ海を取り巻く地域という地域的枠組みを設定することによって、ネイションの戦争体験に回収されにくい人々の戦争体験を描き出し、オーストラリア・インドネシア・パプアニューギニア・東ティモール・日本の国境を越えた地域における歴史のダイナミズムを提示することを目的とした。

３．研究の方法

本課題には、政治学、文学、歴史社会学、歴史人類学、社会学の分野で、オーストラリアやインドネシアの状況に精通した研究者による共同研究として取り組んだ。

（1）鎌田（研究代表者）は、ダーウィンおよびブルーム（オーストラリア）での聞き取り調査、および国立公文書館、北部準州（NT）公文書館、NT 図書館などでの史・資料収集を行ない、日本軍によるダーウィン爆撃の追悼式典にみられる公的記憶の再構築のプロセスと、戦時下のアボリジニ労働者の体験とその集団的記憶を分析した。

（2）加藤（研究分担者）は、ブルーム、パース、ダーウィン、キャンベラ（オーストラリア）で、聞き取り調査や文献収集を行ない、豪文学における太平洋戦争と日本人や真珠貝採取潜水夫の表象に関する分析を行なった。

（3）内海（研究分担者）は、ババル島における日本軍による住民虐殺事件や、ドボやジャカルタ（インドネシア）、ダーウィン（オーストラリア）などの日本人真珠貝採取潜水夫が活躍した地域や、沖縄・和歌山・熊本など潜水夫を送り出した地域での聞き取り調査や史・資料収集を行ない、当地域での戦時中の現地住民、日本人（朝鮮・台湾人を含む）や真珠貝採取潜水夫の体験に関する調査を行なった。

（4）田村（海外連携研究者）は、シドニーや熊本・呉・東京での聞き取り調査および史・資料収集を行ない、シドニー湾攻撃を行なった特殊潜航艇の追悼・慰霊の日豪比較、およびラバウル派遣の日本人従軍看護婦の体験に関する調査・分析を行なった。

（5）飯笹（研究協力者）は、シドニー、ダーウィン、ブルーム（オーストラリア）での聞き取り調査および資料収集を行ない、オーストラリアの学校教育における太平洋戦争の描かれ方を分析した。

４．研究成果

本課題の研究成果は、個々の研究者が学会

発表や雑誌投稿論文で成果発表を行なうとともに、鎌田真弓（編著）『戦争、市民、ネイション―オーストラリアの太平洋戦争』（2010 年 3 月）で成果報告書としてまとめて公表した。

（1）オーストラリアにおける太平洋戦争の公的・集団的記憶の諸相

鎌田、田村、加藤、飯笹の研究によって、太平洋戦争は「クニを守った戦争」としてオーストラリアで定着し、自らに犠牲を強いた兵士を追悼し顕彰する姿勢が顕著になっていることが明らかになった。

① 鎌田はダーウィン爆撃の追悼式は、当初は犠牲となった人々を追悼する場であったが、1990 年代以降は「国防の最前線での戦い」と「国民の受難」という言説がつくりあげられてきたことが明らかにした。昨今の追悼式では特に、「クニを守った」豪軍兵士の顕彰に重点が置かれている。

② 田村の研究によってシドニー湾攻撃後に引き揚げられた日本軍特殊潜航艇の展示は、「戦利品」から、「国民の戦争体験の物語」へと展示の含意が変化してきたことが明らかになった。また、引き揚げ後は日本人乗組員の海軍葬を行なって遺灰を日本に返還しており、日豪の和解のシンボルとしても重要な役割を果たしてきた。今日の豪戦争記念館での特殊潜航艇の展示には、日本人乗組員の物語が展開できる場が提供されている。

③ 加藤は、豪文学に表象される太平洋戦争では、日本人を他者として描き、戦時下のオーストラリア人の姿を描くことによって、戦争体験を共有してオーストラリア人としての一体感を生み出していることを分析した。そこでは、加害者としてのオーストラリア人の立場には触れず、また、逞しくユーモアに溢れたアンザック兵の像からはニュージーランド兵は都合よく抜け落ちている。

④ 歴史教育は集団的な記憶を将来に継承していく役割と担うものであるが、飯笹は太平洋戦争は多文化ネイション・オーストラリアの再統合を図る上で、「安全な歴史」を提供していると指摘した。NT 政府が作成した教材にしても、「地域の物語」を提示しながらも、結局のところ「国防の最前線」としてナショナルな物語へと組込まれることを希求している。

⑤ 鎌田、田村、加藤、飯笹の研究が共通して指摘することは、過去の日本との敵対関係は現在の日本・日本人像には投影されていないことである。

⑥ 以上のような表象においては、オーストラリア人と他者である日本人との親和性や類似性はみられず、また、アジア系住民やアボリジニ労働者や日本人潜水夫の「周辺部」にある人々の個別的な体験が抜け落ちている。

（2）オーストラリア先住民の戦争体験

鎌田は、戦時中の北部特別地域での豪陸軍による雇用体験が、アボリジニ労働者にそれまでの劣悪な労働環境を認識させ、戦後のアボリジニによる労働運動や市民権回復運動を先導したことを明らかにした。しかし、こうした事実は今日のオーストラリアではほとんど認識されていない。また、国民の受難の一部としてアボリジニの戦争体験が語られることはあっても、当局の都合によって移動させられ、賃金も一般労働者とは雲泥の差があったという不都合な事実は語られていない。

（3）日本人真珠貝潜水夫の戦争体験

内海による日本人潜水夫の聞き取り調査からは、彼らの実体験においては、日本とインドネシアのアル諸島やオーストラリアのメルヴィル島や木曜島やブルームが１つの地域を形成していたことが生き生きと伝わ

ってくる。戦後は真珠貝の需要が落ち、アラフラ出漁も一時的なものとして終了したが、その後、真珠貝やエビの養殖地としてこうした地域でアジア系住民が活躍している。太平洋戦争がアラフラ海周辺地域での人々の活動や交流にどのような影響を与え、戦後いかに生活圏が再生されのか、さらなる研究の必要性が認識された。

加藤の研究によれば、豪文学における豪北部のアジア系の住民や日本人潜水夫の表象は多くはない。しかしながら、多文化化するオーストラリアの現代文学では、作家やテーマも大きく変化しており、今後も着目すべきテーマであることが確認された。

（4）日本人従軍看護婦の戦争体験

田村による横須賀海軍共済病院から派遣された看護婦に関する研究は、戦争に参加した日本人女性からの新たな視点を提供するものである。当時ラバウルはオーストラリアの委任統治領で、彼女たちは日豪の戦場を体験した人々である。日本ではこうした従軍女性の体験に光を当てられることはなく、積極的な顕彰も行なわれていない。聞き取り調査からは、医療品や水が不足する中で、疲労と慢性的な睡眠不足と闘いながら、献身的に治療にあたった従軍看護婦の姿が明らかになっている。

（5）太平洋戦争の追悼・慰霊に関する日豪比較

① オーストラリアにおいては、太平洋戦争を日本軍の進攻から「クニを守った戦争」として位置づけられているために、追悼式典や戦争展示では兵士を顕彰することが第一義的目的とされる傾向が強い。特に多文化化する社会においては、国民の受難の歴史として表象されるだけでなく、先住民や女性の戦場での貢献が積極的に顕彰されている。一方で、日本においては太平洋戦争は国民の受難の歴史であり、銃後の守りの女性が語られることがあっても、戦場での女性の貢献が積極的に語られることは少ない。

② 日本においては、太平洋戦争は対米戦争という認識が強く、激戦地であった東部ニューギニアがオーストラリアの行政区であったことや、かつて日豪が交戦国であったことすら想起されないことが多い。

③ こうした記憶の非対称性を反映して、カウラ脱走事件の追悼式や、シドニー湾攻撃の特殊潜航艇の展示および慰霊祭など、オーストラリアでは太平洋戦争の記憶を通した日豪の「和解」が語られるが、日本ではそうした認識は乏しい。

④ 日豪で共通する点は、パプアニューギニアやインドネシアが、かつては両国の戦場となり、地域の住民に理不尽な受難を強いたことへの認識が低いことである。また、戦争によってアラフラ海周辺地域にあった経済圏は分断されて、現地の住民や日本人潜水夫の労働移動も遮断されたが、当地域における戦前・戦中・戦後を通したモノやヒトの移動の動態に関する研究はなく、今後の研究課題とすべきであることを痛感した。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計８件）

① 2009 年度

田村恵子 "Triumphant Return in Silence': The Japanese midget submarine attack in Sydney and its aftermath", Wartime, Issue 45, 2009, pp. 46-49 （査読無）

② 2008 年度

鎌田真弓「ダーウィン爆撃：公的記憶の再構築」『名古屋商科大学論集』第 53 巻 2 号、85-103 頁、2009 年（査読無）

加藤めぐみ "The Colonial Eye: Darwin and Representations of the Japanese 'Other' in Australian Writings"、明星大学研究紀要、

第 16 号、17-25 頁（査読有）
加藤めぐみ "Narrating the Other at War: The Pacific War and the Japanese in Australian Literature"、明星大学研究紀要、第 17 号、53-60 頁（査読有）
田村恵子　「パネル・ディスカッション『軍事史研究と戦争展示』」『軍事史学』第 44 巻 4 号、2009 年、9-38 頁（査読無）
③　2007 年度
鎌田真弓「研究ノート　太平洋戦争とオーストラリア先住民：NT を中心として」『名古屋商科大学論集』第 52 巻 2 号、2008 年, 183-194 頁（査読無）
加藤めぐみ「オーストラリア文学にみる日本人描写と太平洋戦争：ブルームの場合」『南半球評論』第 23 号、2008 年、56-70 頁（査読無）
内海愛子 'From an "Island of Massacres" to an "Island of Peace ": Invitation to a Discussion of "Peace "on Jeju Island', *Peace Studies Bulletin*, 2007, pp.2-3（査読無）

〔学会発表〕（計 7 件）
①　2009 年度
鎌田真弓 "The Bombing of Darwin: Commemoration of the Nation's War", JSAA-ICJLE International Conference パネルセッション Memories of the Pacific War, 2009 年 7 月 15 日、ニューサウスウェールズ大学（シドニー、オーストラリア）
田村恵子 "'Triumphant Return in Silence': How the Japanese Midget Submariners' Deaths were Handled in Australia and Japan",学会名・発表場所等は同上
加藤めぐみ " Memories of the Pacific War in Australian Literature",学会名・発表場所等は同上
②　2008 年度
鎌田真弓「ダーウィン爆撃のコメモレイション：追悼と顕彰」オーストラリア学会関西例会、2009 年 3 月 14 日、追手門学院大学
田村恵子「デーミアン・ペアラーのニュース映画の中の日本兵」学会名・発表場所等は同上
加藤めぐみ "Narrating the Other at War", Home and Away: Writing about Place Colloquium、2008 年 10 月 24 日、オーストラリア国立図書館（キャンベラ、オーストラリア）
③　2007 年度
加藤めぐみ "The Colonial Eye: Darwin and Representations of the Japanese 'Other' in Australian Writing", paper presented at "Colonial Present', The Association for the Study of Australian Literature、2007 年 7 月 2 日、クィーンズランド大学（ブリスベン、オーストラリア）

〔図書〕（計 16 件）
①　2009 年度
鎌田真弓「オーストラリアン・アイデンティティと戦争の記憶」早稲田大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究　多文化社会日本への提言』オセアニア出版、2009 年、166-184 頁
加藤めぐみ「多文化オーストラリアの現代文学」早稲田大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究　多文化社会日本への提言』オセアニア出版、2009 年、185-201 頁
内海愛子「サンフランシスコ講和条約と東アジア」岩崎稔他編著『戦後日本スタディーズ』紀伊国屋書店、2009 年、135-153 頁
内海愛子「漂泊のメガホン―日夏英太郎-許泳-ドクトル・フユン」佐藤忠男編著『日本のドキュメンタリー』岩波書店、2009 年、29-34 頁
鎌田真弓編著『戦争、市民、ネイション-オ

ーストラリアの太平洋戦争』平成 19-21 年度科学研究費補助金 (C) 成果報告書、2010 年、110 頁

鎌田真弓「太平洋戦争の公的記憶と豪戦争記念館」上記報告書所収、4-12 頁

田村恵子「オーストラリアにおける特殊潜航艇展示の変遷」上記成果報告書所収、13-21 頁

鎌田真弓「ダーウィン爆撃追悼式―記憶の再構築のプロセス―」上記成果報告書所収、22-34 頁

加藤めぐみ「オーストラリア文学に表象される太平洋戦争」上記成果報告書所収、35-44 頁

飯笹佐代子「戦争の歴史を学ぶ―教材における太平洋戦争の描かれ方―」上記成果報告書所収、45-54 頁

鎌田真弓「太平洋戦争とアボリジニ労働者」上記成果報告書所収、55-65 頁

田村恵子「ラバウルの日本人従軍看護婦たち」および「資料　ラバウル派遣従軍看護婦手記」上記成果報告書所収、66-77 頁

内海愛子「資料　アラフラ海のダイバーたち―林春彦さんの証言―」上記成果報告書所収、78-108 頁

②　2008 年度

加藤めぐみ *Narrating the Other: Australian Literary Perceptions of Japan*, Monash University Press, 2008, 234 頁

内海愛子『キムはなぜ裁かれたのか一朝鮮人 BC 級戦犯の軌跡』朝日新聞出版、2008 年、382 頁

田村恵子「ラバウルへの看護婦派遣」閉校記念誌編集委員会編『夢翔－100 年のあゆみ(横須賀共済病院看護専門学校 100 年史)』横須賀共済病院看護専門学校、2009 年、30-34 頁

〔産業財産権〕(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

田村恵子 "Japanese midget submarine attack on Sydney Harbour and its aftermath", 豪日研究プロジェクトウェブサイト（豪戦争記念館）http://ajrp2.nsf/

６．研究組織

(1)研究代表者
鎌田　真弓（KAMADA MAYUMI）
名古屋商科大学・マーケティング学部・教授
研究者番号：20259344

(2)研究分担者
加藤　めぐみ（KATO MEGUMI）
明星大学・一般教育・教授
研究者番号：30247168

内海　愛子（UTSUMI AIKO）
大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・客員教授
研究者番号：70203560

(3)連携研究者
田村　恵子（TAMURA KEIKO）
オーストラリア国立大学・アジア太平洋学部・客員研究員

(4)研究協力者
飯笹　佐代子（IIZASA SAYOKO）
総合研究開発機構・研究調査部・リサーチフェロー